

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味します。

編集・発行：日本マラウイ協会

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-2-24 青年海外協力協会気付

Tel. 03-3447-2921 Fax 03-5798-4269

Home Page <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>

E-mail japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

【マラウイ共和国】

面積：118,484 平方 km (日本の約 1/3)

人口：1120 万人(2004 年世界銀行)、首都：リロングウェ

独立：1964 年7月6日、公用語：英語、チェワ語

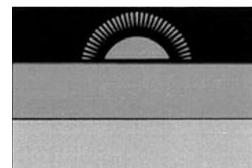
政体：共和制、大統領：ピング・ワ・ムタリカ

為替レート：US\$1 = MK 144.49(3月12日現在)

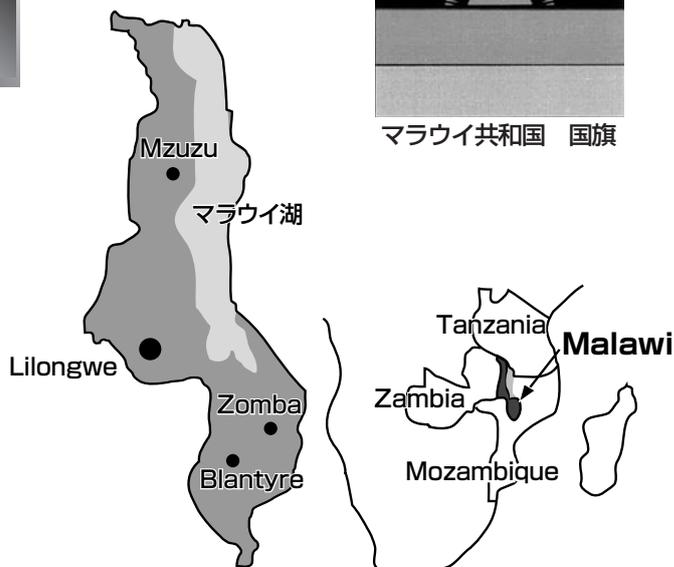
MK 1 = 0.8748 円(3月12日現在)

【日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan)】

日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。趣旨をご理解の上、広く各位の入会を希望します。会員数：266 人(3月1日現在)



マラウイ共和国 国旗



レポート

文責：JOCA 丹羽克介

本紙第 33 号(2005 年 3 月 23 日発行)でご紹介した青年海外協力協会(JOCA)設立 20 周年記念事業～マラウイ農民自立支援プロジェクト～の近況レポートが届きました。第 33 号とあわせてご覧下さい。

対象期間：2005 年 9 月～2008 年 8 月(3 年間)

協力相手機関：マラウイ農業食糧保障省

対象地域：ムジンバ県
カゾンバ普及計画地域

対象受益者：小規模農家約 1400 世帯

上位目標：農民の生活レベルが向上する

プロジェクト目標：地域を活性化する農民のリーダーが育つ

今年の雨量は昨年を上回っているらしく、過剰な雨量はせつかくの肥料も流されてメイズの収量に悪影響を及ぼすと予想されています。

さて、2005 年年 9 月より 3 ヵ年計画で始まったプロジェクトは、ようやく折り返し地点を過ぎました。農民に対しては年間を通して食糧を充足させることと現金収入の向上を目標にあげる一方、当初から「モノの提供はしません、あなたたち(農民たち)が指定する場所(村/グループ展示畑)で、あなたたちから要望のある研修を実施します」という姿勢を通して、必要最低限の投入を心がけ、彼らが潜在的に持つ自立してこうとする意識を引出すことに取り組んできました。

主な研修内容として、主食のメイズはじめ、マメやサツマイモ、キャッサバといった食用作物栽培、トマト、葉野菜、キャベツなどの野菜栽培、堆肥づくり、小規模灌漑、作物の貯蔵法、グループ組織研修、また、ヤギの飼養管理法などを行ってきました。時には栄養士隊員を講師として招いて干し芋の作り方を紹介したり、マラウイのある地域に昔から伝わるサツマイモ貯蔵法を実践して成功している先進農家を迎えたこともあります。

こうして実施してきた研修は、現在(2007 年 1 月 31 日時点)までに、延べ 274 回、延べ参加人数 5504 人(うち男性 2635 人、女性 2869 人)に達しています。研修回数約半数は、農家

が主体となって実施されました。要するに、農家が研修を通して学んだ技術やスキルを自分の村もしくは他の村/グループまで出向き、研修を行っているのです。私たちはこういった普及員に代わる篤農家を“伝達農家”と呼んでいます。彼らの働きによって、普及技術と共にプロジェクトのコンセプトが他の地域まで波及しています。こうして研修を続けるうちに、開始時に対象とした 23 の村が間もなく淘汰されたのち、新たな村やグループができたりして、現在、20 村に 21 グループが存在します。うち 13 グループが活発に活動しています。さらにプロジェクトのうわさを聞いたり、村/グループ展示畑の出来ばえをみて興味をもった周辺農家(グループ)から依頼があり、増加傾向にあるようです。プロジェクトからもなるべくグループ間の交換訪問を促していますが、こうした交流がより多くなることで、互いに刺激しあい、気付け合い、また嫉妬を越えるプラスの何かが生まれることを期待しています。



▲ 何故、展示畑を作るか説明している筆者

最初のころは、農民だけでなく農業省のスタッフの中にも種や肥料の提供なしに何ができるんだという意見もあったようですが、成果が徐々に現れるにつれて JOCA プロジェクトのコンセプトを理解し同調するものが増えてきています。また、活動停止していた農家の中には、やっぱりあんたらが正しい(あせらずできる範囲で一歩ずつ前進するしかない)と戻ってくるものも出てきています。引き続き、忍耐強く農民達の自立の芽がもっとと吹くようお手伝いしていきたいと思っています。



◀ 収穫前のキャベツ栽培

イベント グローバルフェスタ 2006

2006 年 9 月 30 日(土)、10 月 1 日(日)の両日、東京・日比谷公園で「グローバルフェスタ 2006」が開かれました。これは 2004 年まで「国際協力フェスティバル」と言われていた催しで、2005 年から名称が変更されました。今回で 16 回目となりますが、日本マラウイ協会は、94 年の初参加から 13 回連続の参加となりました。

当日は割り当てられたテントに、マラウイ国内の写真パネルや、当会の活動を紹介するパネルを展示しました。また、当会編集の国情紹介誌「マラウイ The Warm Heart of Africa 第 2 版」や旅行ガイドブック「暖かきアフリカの心 - 湖とサバンナの大地へ」、「チェワ辞典改訂版」および当会編集協力の児童文学書「ヘブンショップ」、青年海外協力隊(JOCV)マラウイ派遣 OB/OG が持ち帰った民芸品、それに山田耕平 OB の CD「ディマクコンダ」などの販売を行いました。



◀ マラウイ協会テントの様子

さらに「マラウイ隊員母の会」の皆さんのご協力により、手作りのチテンジバッグも販売し、来

場の方々へマラウイの紹介・案内に努めました。

以下は「マラウイ隊員母の会」からいただいた出展に至るまでの経緯です。

グローバルフェスタ・デビューの記

マラウイ隊員母の会 佐藤順子

初めて国際協力フェスティバル (2005 年から名称変更) にお邪魔したのは 2 年前。忘れもしない、「視察の旅」から帰った翌日でした。旅の興奮も冷めやらぬまま日本マラウイ協会のブースを探しあて、スタッフの皆さんからマラウイの話を知ることができました。あの時は、まさか 2 年後に自分もテントの下で、声を震らすことになるとは、思いもせませんでした。単なる来場者から一転して、日比谷公園デビューを果たすなんて!!



▲ 参加した母の会メンバー、左端が筆者

「母の会」は、東京周辺に住む隊員・元隊員家族のグループで、マラウイに関する情報交換、アフリカ関連のイベントや講座に参加、アフリカを支援する活動に加わるなどしています。きっかけは 3 年近く前、壮行会や見送りの際に知り合った母親同士が連絡先を交換したことでした。任国に関する情報はあまりにも少なく、あってもマイナスイメージ。「あの子達、一体何を食べて、どんな暮らしをしているのかしら…果たして無事に帰国できるのか?」当人たちが嵐のように出発したあと、心配ばかりふくらむ母同士は、会ってそんな話をせずにいられませんでした。けれど、その後回数も重なり、メンバーが増えるにつれ、国際電話のかけ方やタイミング、航空便で荷物を確実に届けるコツ、軽くて高張らず、栄養があり、しかも喜ばれる物は? など、プチ役立ち情報の交換会にもなりました。一方、マラウイの地図を広げては任地を確認し、送られてきた写真や葉書を見せあい、各自が入手した資料を読みあううちに、知識が格段に増えました。途上国の問題、援助の難しさなども、隊員とのメールのやりとりから垣間見えてきます。おかげで母達もずいぶん色々なことを考え、勉強させてもらいました。やがてメンバーから「私たちにも何かできないかしら」という声が出てきました。

そして、2006 年 9 月 30 日、10 月 1 日に開催されたグローバルフェスタで、日本マラウイ協会の出展に「母の会」も参加。収益金をマラウイの子どもたちに役立てることを趣旨に、「チテンジバッグ」の販売が実現しました。このバッグは、隊員が HIV エイズ孤児の自立支援活動として現地で製作を指導しているトートバッグを参考にしたもの。チテンジは、マラウイの女性が頭や腰に巻いたり、こどもをおぶったり、または風呂敷のように使う布地で、鮮やかな色や大胆なプリントが魅力です。「マラウイの子ど

もたちが縫える物なら、日本の母にも縫えるはず」と、隊員や現地を訪問した家族のおみやげ、寄付などで集まったチテンジに裏地をつけ、メンバーが丁寧に縫いました。

おかげさまで約 6 万円の収益を得たうえ、チテンジバッグを仲立ちにたくさんの方々と交流できたのが収穫でした。候補生と一緒に見えたお母さんに、「先輩留守家族」の経験談も披露できました。

日本マラウイ協会をはじめ、ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

独りで心配している「母」の皆さん、ご連絡ください。ポタン、チテンジの寄付、バッグ作りへの参加もお待ちしております。

連絡先: マラウイ隊員母の会 佐藤順子

E-mail: : amai_3@yahoo.co.jp

イベント アフリカンジャンボ in 目黒

~ Warm Heart of Africa お裾分け日和 ~

JOCV OB 昭和 52 年度 1 次隊後期組
上下水道 吉田 均

昨年の年の瀬 12 月 3 日、目黒区で開かれた「アフリカンジャンボ in 目黒」で関香織さん(平成 16 年度 1 次隊 エイズ対策)と笹生博夫さん(昭和 49 年度 1 次隊後期組 映像)がマラウイについて講演された。

笹生さんは現在目黒区在住で、私が広尾訓練所時代にマラウイについてお話しをしていただいた大先輩。関さんは最近までマラウイ南部で HIV 対策の医療活動をされて来られた。新旧のマラウイの話しを聞けるいい機会と思い目黒駅からバスで 25 分、会場へ向かった。元区役所だったコミュニティーホール地下の一室へ入る。すでに、先輩の三浦洋子さん(昭和 49 年度 2 次隊後期組 看護師)とマラウイ母の会、佐藤順子さんが席についておられた。

主催されている方々は、以前ザイルで企業として橋を建設された方や国際線のチーフパーサーをされた方、そしてアフリカに関心の高い方と、目黒区でアフリカを広めることに熱心な会だった。

関さんは以前フィリピンに隊員として行かれた経験があり、マラウイでは HIV 対策医療だけでなく、洋裁指導も行ってこられた。その活動の厚みに畏敬の念を持った。関さんのお母様は、昨秋グローバルフェスタで好評だった母の会「チテンジバッグ」を主導的に推進されたプロ。笹生さんは協力隊後、BBC の特派員として活躍され、新鮮なアフリカ事情を常に側に置いておられ、ジャーナリストの目でとらえるマラウイの姿が新鮮に伝わった。

マラウイに隊員が派遣されて 36 年、そろそろ二世隊員が行ってもおがしくない時である。時代が変わっても日本の青年としてマラウイで感じるマラウイ人の心は変わらないと思う。「Warm Heart of Africa」は今もマラウイに生き、私達が味わったあの思いを今の隊員たちも味わっている。それが日本マラウイ協会として結束できる原点でもあると、お二人のトークの中から知ることができた。

同じくマラウイに行った者として、三浦さんと私も少しお話しを頂いた。20 名くらいの会場だったが、そこに参加している方々に、私達がマラウイで知った「Warm Heart of Africa」のお裾分け日和になった。

イベント

マラウイ紹介講座

浦安市国際センター 稲葉 りか

千葉県浦安市国際センターは昨年の 4 月にオープンし、浦安市民の方への国際交流・国際協力に関する情報提供や支援活動をしております。

国際センター主催事業として、月毎に特定国を決め、その国を紹介する館内展示や講座、講演会を定期的に開催しています。12 月 1 日は世界エイズデーということもあり、マラウイ OB である山田耕平さんの講演会とマラウイ国を紹介する講座を実施することになりました。そして日本マラウイ協会とマラウイ大使館の協力を得て昨年の 12 月 10 日(日) 13:30 ~ 16:00 に、「感じる! アフリカンハート」と称する講座を開催しました。

第一部は「触れる! アフリカのこころ」をテーマに、マラウイ大使館のグレース・カロンガ一等書記官によるマラウイ事情の紹介を行いました。マラウイの概要から始まり、人々の生活の様子や最新事情等を写真や実物を用い、分かりやすく、楽しく説明して頂きました。



▲ カロンガ書記官の講演

第二部は「食べる! アフリカのこころ」をテーマに、日本マラウイ協会会員の皆さんによる「シマ作り」、「マラウイの遊び紹介」、「水汲み体験」を行いました。シマの粉を本場マラウイから取り寄せて頂き、任国で培った経験を基に会員の皆さんに教えて頂きました。そして、シマをこねた後、マラウイで一般的に食べられているおかずと共に試食をしました。多くは、今回始めてシマを口にするとばかりなのですが、「美味しい」という声に参加者の皆さんから聞こえてきました。また、水汲み体験では、カロンガさんにお手本を見せて頂き、実際に頭の上に水の入ったバケツを乗せて水運びにチャレンジしました。簡単に頭の上に乗せるカロンガさんですが、実際にやってみるとバランスを取るのが難しく、そして何より水の重さを実感していました。



▲ シマをこねる参加者

一般的にはあまり知られておらず、マイナスなイメージがある途上国のひとつでもあるマラウイですが、今回は私達の生活に身近な「食・シマ」と交流を通して、参加者の皆さんにマラウイを知ってもらう良い機会になりました。

このように、国際センターでは月別で取り上げる国をテーマに講座を開催しています。4 月はタイです。興味のある方は是非、お問い合わせ下さい。 URL: <http://urayasu-ic.jp>

投稿

17年ぶりのマラウイ

JOCV OB 昭和55年度2次隊
郡 昭治

2月4日午後6時30分に成田から香港へ約5時間のフライト、1時間20分のトランジットを経て、エコノミー症候群を危惧しながら13時間50分のヨハネスバーグまでの長いフライトを満喫しました。それにしても、南アフリカ航空の機内で、日本語字幕の映画が見られるとは思いませんでした。「The Queen」「The Man of the Year」など、窮屈な体勢をキープしての映画鑑賞でしたが、ワインを飲みながら、長いフライトを楽しく過ごすことが出来ました。私がマラウイに滞在していた頃は、南アフリカのapartheid政策から、南アフリカへの入国が出来なかったため、ヨハネスバーグでのトランジットは感無量でした。空港内で比較的高齢の日本人団体旅行者にガイドがツアーの説明をしているのが印象的でした。

リロングウェ・カムズ国際空港

ヨハネスバーグから2時間半のフライトを経て、マラウイ、リロングウェ・カムズ国際空港についた時は、17年前にこの空港から帰国した時の想いがよみがえり、時の流れの速さ、重さをずっしりと感じました(今は空港名称に「カムズ」という文字が入っています)。1980年10月にはじめてマラウイに赴任した時はジャカランダで紫に染まるブランタイア・チレカ空港に着陸しました。小さくて簡素な空港であったと記憶しています。それに比べて日本の援助を得て建設されたリロングウェ・カムズ国際空港は、当時はりっぱな空港に感じられましたが、現在は「暗いな～」、「汚れたな～」、「売店が少ないな～」と言う印象でした。かなり私の中で美化していたこともあるかも知れませんが、もう少しリフォームを継続的に行っていれば、建設当時の美しさをキープ出来たのではと思わずにいられません。

ホテル・レストラン・ショッピング

2週間のマラウイの滞在中、リロングウェでは、エリア3の「コリアンガーデン」と言う、キャピタルホテル、リロングウェホテルに次ぐ第三のホテル(誰が言ったか忘れましたが)に泊まりました。ゲートがしっかり閉まること、掃除が比較的にきちんとされていること、韓国レストランがあること、ネットが使えること、更にオーナーの奥様が元隊員であることから、日本人の客が多く宿泊していました。隊員ドミトリー(昔のまま)から歩いて10分程の距離です。

リロングウェホテル、キャピタルホテルは、そのままの風貌を保っていました。リロングウェホテル近郊には、「ムズング」を意識した「ハイソ」なショッピングコンプレックスが出来ており、ピザ、ハンバーグ等(店はマック等とほとんど同じ作り)が食べられます。値段はほぼ世界共通であるようです。

そうそう、「金龍」と書いたと思いますが、「ゴールデンドラゴン・レストラン」が開店しており、ブランタイアの香港レストランがリロングウェへの進出を狙っているとのことでした。

た(ほんとにローカルな話題で、派遣された時代が離れていると理解されない話題かも知れません。でも自己満足で書かせて頂きます)。

さて、マラウイの食事情で不可欠なのは、もちろん「カニャーニャ」でしょう。マラウイで何がしたいと聞かれれば、「カニャーニャ食べたい!」と答える元隊員が一番多いのではないのでしょうか!(比較的安全な地区とのことで)夜7時頃にエリア47のカニャーニャを



▲エリア47のカニャーニャ屋

食べに行きました。説明の必要も無いと思いますが、「牛、鳥、豚の鉄板炭焼き」です。いや～、夜空を眺めながら、ポトルストアーの前にビールケースをいす代わりにして、中ピンのグリーンをピンのまま飲む。この味わいは・ええ、何とも言えません。(でもほんとは、プラスチックのテーブルとイスが置いてあって、ちょっとモダンになっていました)牛のカニャーニャを1皿(40切ぐらいかな)で1400クワチャ(約1200円位)請求されたのには驚き、時代の流れを感じました。

カムズ・バンダ大統領

1980年、私が隊員として赴任した当時、また1987年の調整員としての赴任当時は、バンダ終身大統領が国を治めており、いろいろ興味深い催しやシステムがありました。当時、ブランタイアにJOCV事務所があったころは、バンダ大統領が空港からブランタイア市内に移動する際、事務所の前を通ったため、その数時間前から道路が閉鎖され、手を振って送迎をしたものです。バンダ大統領は事務所の存在を知っていて、必ずオープンカーの上から顔を乗り出して手を振ってくれました。また、独立記念日には、リンベのカムズ・スタジアムで記念式典が行われ、カムズ大統領を称えて、地区対抗の女性の民族ダンスが熱狂的に展開され、駆り出された女性隊員も民族を超えてダンスを楽しんでいました。現ムタリカ大統領は、バンダ大統領の業績を称えて、2年前に8千万クワチャをかけて記念碑を作りました。いや～、りっぱりっぱ! ちょっとかけすぎかな…



▲バンダ大統領の記念碑

協力隊員

今回、地方隊員の任地2箇所とリロングウェ隊員数名の任地を訪問させて頂く機会がありました。

帰国約半年前の教師隊員は、授業風景も生活も、積み重ねた経験から十分余裕を感じさせるものでした。「延長を希望されますか」との質問に、「2年で任期を全うし、日本で教職に就きたい」とのことでした。

孤児施設運営、エイズ感染者対策、村落住民栄養改善を主たる目的に、支援活動を行っているNPO団体に派遣されている隊員の任地を訪問しました。野菜栽培を手掛けている隊員は天候に左右されることも多く悩みは尽きないようでした。エイズ対策の隊員は、赴任間もないため、言葉の問題に悩んでいました。その他、隊員の悩みはいつの時代も同じ様なもので、隊員を20年以上前に通り過ぎてしまった先輩としては、悩める今のあなたがうらやましい、とはとても言えませんでした。

台湾からの援助

マラウイで目立ったことの1つは、台湾とマラウイの共同プロジェクトが多いことでした。井戸掘り、職業訓練校への機材供与、際立っては国会議事堂建設でしょうか。大きなクレーン車が、議事堂建設に使用されている光景には驚かされました。

ムジンバの村

丹羽JOCA職員の案内で、JOCA農業プロジェクトの視察もさせて頂きました。マラウイ最貧困層の村での実践であり、農民自身が村を活性化していくための自助努力を促す側面的協力に徹していることが見受けられました。

プロジェクトは技術を得ようとする村の若者に技術を伝え、村の若者が更に外の村々に技術を広げていくと言う手法を取るという趣旨で、視察した村ではその趣旨も理解され、丹羽職員と村民の信頼関係もよく築かれているようでした。

昼食には貴重な鶏肉をご馳走して頂き、婦人たちの民族ダンスのおまけつきでした。やはり、村落の人々の優しさは、何十年経っても変わらないな～と、ふるさに帰った思いがしました。

変わったところ、変わらないところ

さて、マラウイの変わったことといえば、リロングウェの星が著しく少なくなったことでしょうか。隊員としてリロングウェに赴任した当時、ホテル「リンガジ・イン」でグリーンを飲みながら見上げた星空は、決して忘れることがありません。ミルキーウエー、さそり座、南十字星、そして人工衛星までが見えました。当時と比べて驚くほど星が少なくなったのは、街がそれだけ明るくなったからとのことでした。確かにショッピングコンプレックスなども出来て、24時間営業のコンビニ(セブンイレブン)やガソリンスタンドも増えており、近代化したと言うことでしょうか。街の中では、裸足の子供をほとんど見かけませんでした。ただし、自転車のフレームを棒で転がして遊んでいる子供を見かけて、う～ん、マラウイだと納得しました。



▲村でメイズをつく子供

リロングウェ⇄ブランタイア間のコーチラインバスが、日本の長距離バスに劣らない美しいバスで、これなら快適な移動が出来ると確信しました。街にはミニバスが多く走っていました。確か17年前はなかったな!

湖の魚・チャンボが随分小振りになっていました。たまたま「サリマ」の街で食べたチャンボが小さかったわけではなく、当時を知る方にうかがったのですが、大きなものは、ほとんど手に入らなくなったとのことでした。

美人の女性が街に見かけられたので、現地の人に伺ったところソマリア系の人達が働きに来ているとのことでした。

治安は悪くなっているとのこと、夜一人では歩かない方が良いと注意を受けました。これも 17 年前には考えられなかったことです。

商店の経営者にインド系の人々が減ったように感じました。やはり中国人が増えている様です。飲食店経営は、アラブ系の人が多いように感じました。

いろいろ変わったと思われるところを書いてみましたが、要するにそれ以外は、あまり変わっていないと言うことです。全体的な印象としては、昔のままの風景、昔のままの人々の思いやり、昔のままの単純さが、ふるさとに帰ったような安堵感を与えてくれました。

再びマラウイに帰れる機会などそうあるとは思えませんが、20 年後を思い描いても、表面上の変化はあれど、今感じた安堵感はやはり変わらないだろうと思います。むしろ日本や自分が 20 年後どう変わっているのか、そちらの方が想像もつきません。

最後に 18 年前にリロングウェで交通事故に

より亡くなられた金次典典君 (昭和 63 年度 1 次隊 電気機器:新しい碑が建てられておりました)、及びマラウイで亡くなられた方々の冥福をお祈りして、2007 年 2 月のマラウイ報告を終わらせて頂きます。

投稿 幸運だった感動の初体験

株式会社 安部日鋼工業 北原 常人

M5 道路のルワシ川とナンコケ川に橋を架けてきました。

51 歳の私は昨年の 7 月から 5 ヶ月間、ムアに本拠地を置き、プレストレストコンクリート製の橋桁を 16 本架けたのです。

マラウイでの最初の感動は、働く人たちが初めての仕事を理解できないのは当たり前で、それでも何とか自分たちで橋を造りたいという真剣さです。

言葉も交わさずに日本流のスピードを求め指導をする私たちを「ジャパニーズ、クイック」と揶揄する彼らは、歌を口ずさみ、たまには手を休めてお喋りをしながら、楽しく仕事を進めるのは極々普通なんですね。

工事中はたくさんの子供が興味深く見学に来てくれました。その目は輝き、彼らと会話ができたらもっと勇気を与えてくれたに違いありません。

世界を股にかける大日本土木株式会社 日下清所長には、海外での日本人土木技術屋のあり

方から生活面まで全てをお世話になり、同じく菊池嘉伸主任には、コンクリートの打設方法等々の細部までご指導いただきました。

そして、日本工営株式会社 高橋政美 技師には、マラウイでの文化から日本の海外貢献、更には宇宙論もご教授いただきました。

また、フィリピンからも技術者やシェフが合流し、彼らの寝食を惜みず真面目に取組む姿勢は感動的でした。

更に、技能職として東栄建設株式会社から妻鳥紀昭氏、上木祐二氏、小野陽平氏も参画し、持参した焼酎 100 本は予定通りに飲み干してしまいました。

日本は極東の特殊な国で、梅干しを食べ、みそ汁を吸い、刺身を美しく盛り付け、腐った納豆を食べる文化を持つ素晴らしい国であることも改めてわかりました。

水道とともに重要な社会資本である道路をこのマラウイに建設できたことは、私の誇りであり、次の希望です。



▲橋の上でスタッフらと

最近のマラウイ関係テレビ番組 / 記事

- 2006.10.20 08:00 ~の一部(7分)
- ① 日本テレビ スッキリ!!「マドンナ、マラウイ 1 歳男児を養子に」
- 剣道日本 2007 年 3 月号 P108 ~
- ② 「国際普及の一翼を担って JICA 派遣指導者の現状と今後」
- 小学一年生 2007 年 1 月号へくらぶ内
- ③ 「みんな一年生だった ~山田耕平さん~」

日本マラウイ協会 平成 18 年 9 月~平成 19 年 2 月主な活動内容

- 【9 月 30 日・10 月 1 日】
- ① グローバルフェスタ 2006 出演 (1~2 面の記事参照)
- ② 【11 月 28 日~】
- 草津ローターアクトクラブ寄付金先探し協力
- ③ 【12 月 3 日】
- 「アフリカンジャンボ in 目黒」開催協力 (2 面の記事参照)
- 【12 月 10 日】
- ④ 浦安市国際センターマラウイ紹介講座開催協力 (2 面の記事参照)
- ⑤ 【1 月 27 日】
- JOCA 新春交歓会に当会紹介コーナー出演
- 【2 月 23 日~】
- ⑥ フェリス女学院大学ボランティアセンター主催 「山田耕平講演会」広報協力



日本マラウイ協会情報



■ 第 25 回通常総会のご案内

日本マラウイ協会は第 25 回通常総会を別紙の通り開催します。会員の皆様は同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

■ KWACHA バックナンバー

当会は今年 2 月 26 日に創立 24 周年を迎えましたが、創立時の機関紙 KWACHA 第 1 号から第 37 号 (今号) までの全バックナンバーを PDF ファイル化し、当会ホームページへ掲載しています。是非ご覧下さい。

URL : <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm> から「日本語」を選択、左端のメニューから「機関紙 KWACHA」をクリックすると、右ページに号数一覧が出てきますので、希望の号数をクリックしてください。

■ 日本マラウイ協会の刊行物

- (1) チェフ語辞典 統合改訂版 (2000 年 7 月発行)
B5 版 186 ページ 1 部 1,500 円 (送料 290 円)
- (2) マラウイ旅行ガイド 新訂第 2 版 (97 年 7 月発行)
「アフリカの暖かき心、湖とサバンナの大地へ」
B5 版 108 ページ 1 部 1,200 円 (送料 210 円)
- (3) 国情紹介誌 「Malawi - The Warm Heart of Africa」
第 2 版 (94 年 7 月発行)
A4 版 40 ページ 1 部 1,000 円 (送料 210 円)

送料は「冊子小包郵便物」扱いで表示しています。複数種を 1 冊づつご注文の場合は次のとおりです。

- (1)+(2) = 340 円 ■ (2)+(3) = 290 円
- (1)+(3) = 340 円 ■ (1)+(2)+(3) = 340 円

各書ご希望の方は、本ページ最後の入会方法の欄に記載の郵便振替口座または銀行口座宛に、代金および送料をお送りください。その際、郵便振替の場合は振替用紙の通信欄に必ず「xxxx xx 冊希望」と明記してください。銀行振込の場合は事前に必ず E-mail、あるいは電話 / FAX で「xxxx xx 冊希望」と当会宛連絡してください。

■ ご意見、ご質問をどうぞ

日本マラウイ協会に対するご意見、ご要望、ご質問などありましたら、下記当協会宛へご遠慮なくお寄せください。また、電子メールによるマラウイ関連情報の配信も行っておりますので、電子メールアドレスをお持ちで、ご希望の方は、あわせてご連絡ください。

■ 日本マラウイ協会 月次定例会

日本マラウイ協会では、毎月第 3 水曜日 18:30 ~ に、東京都内 (通常は JICA 広尾 地球ひろば 会議室) で、月次定例会を開催し、マラウイ関連の支援活動などについての討議や、マラウイ関係者間の情報交換などを行っております。参加は会員でなくても構いません。初めての方も大歓迎です。詳しくは当協会までお問い合わせください。

■ 日本マラウイ協会 入会方法

ご連絡いただければ入会申込書をお送りしますので、各項記入の上ご返送ください。E-Mail で入会希望の旨を連絡くださっても構いません。また、入会金と年会費の合計 (個人正会員の場合 1,000 円 + 3,000 円 = 4,000 円) を下記の銀行口座または郵便振替口座へお送りください。(郵便振替口座が安くて便利です)

〒 150-0012 東京都渋谷区広尾 4-2-24 青年海外協力協会気付
日本マラウイ協会
TEL: 03-3447-2921 FAX: 03-5798-4269
E-mail: japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

三菱東京 UFJ 銀行 東恵比寿支店 普通口座 2557339
口座名義人 日本マラウイ協会事務局 貝塚光宗
郵便振替 00190-7-13125、加入者名 日本マラウイ協会

また、協会規約その他についても上記宛お問い合わせください。